笠井潔
Kiyoshi Kasai

終焉の終り

1991文学的考察

終りの始まり

1991文学的考察

福武書店

笠井潔（かさい　きよし）
一九四八年、東京に生まれる。六八年、和光大学入学。七四年、渡仏。在仏中に『バイバイ、エンジェル』『テロルの現象学』の草稿を完成。七九年、『バイバイ、エンジェル』で第五回角川小説賞受賞。著書としてほかに『物語のウロボロス』『新版機械じかけの夢』（以上筑摩書房）『ヴァンパイヤー戦争』シリーズ（角川書店）『ユートピアの冒険』（毎日新聞社）などがある。

終焉の終り――1991文学的考察

一九九二年　三月一八日　第一刷印刷
一九九二年　三月二五日　第一刷発行

著者　笠井潔
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒102　電話(03)三二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　加藤製本

文字情報処理＝Super Edit system ㈱直江屋 nao-ya

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示してあります）

©K.Kasai 1992
Printed in Japan

ISBN4-8288-2420-0 C0095
NDC914 196 248p

終焉の終り——1991文学的考察　目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

1 終焉と世界の変貌
——加藤典洋『ゆるやかな速度』・吉本ばなな『N・P』 7
2 性・愛・恋
——佐伯一麦『一輪』・山田詠美『トラッシュ』 21
3 ダチュラの行方
——小林恭二『荒野論』・いとうせいこう『ワールズ・エンド・ガーデン』 36
4 個別的なるものの氾濫
——三枝和子『恋愛小説の陥穽』・小川洋子『妊娠カレンダー』 51
5 日本憎悪の涸渇
——島田雅彦『アルマジロ王』・村上竜『コックサッカーブルース』 66
6 錯綜するジェンダー
——松村栄子『僕はかぐや姫』・江國香織『きらきらひかる』 84
7 ポストモダン社会と空虚
——竹野雅人『王様の耳』・辻仁成『カイのおもちゃ箱』 103

8 ラディカリズムの記憶 126
——三田誠広『ベトロスの青い影』・辻章『この世のこと』
9 メタフィクションの陥穽 143
——中島梓『コミュニケーション不全症候群』・竹本健治『ウロボロスの偽書』
10 母と息子の地獄 164
——山下悦子『マザコン文学論』・荻野アンナ『背負い水』
11 イニシエーションの現在 183
——辺見庸『自動起床装置』・池澤夏樹『タマリンドの木』
12 SFと最後の小説 201
——大江健三郎『治療塔惑星』・野阿梓『バベルの薫り』
13 既遂の革命・未遂の恋愛 220
——小田実『ベトナムから遠く離れて』・富岡多恵子『水上庭園』
あとがき 243

終焉の終り

——1991文学的考察

裝丁　菊地信義

1 終焉と世界の変貌

一九八九年の昭和天皇の死、あるいは東欧の共産党政権の崩壊に触発されて、歴史や時代の「終焉」をめぐる論議が、さまざまに行われたことは記憶に新しい。一方には、フランシス・フクヤマに代表される俗流ヘーゲル主義的な「終焉」論があり、他方では、それを批判する反「終焉」論がさまざまに主張された。

フクヤマは「これ（共産主義国家における重要な変化――引用者註）は、次のような歴史の終焉を意味している。つまり、人類のイデオロギー的な進展は終点に達したのであり、欧米の自由な民主主義が人類の統治形態としては究極のものであることを示しているのである」（「歴史は終わったのか」）と語り、浅田彰はそれを批判して、「いま問題なのは「歴史の終焉」ではなく、モダンの始まりであり、また真の意味でのポストモダンの始まりでもあるというべきなのだ。逆説的にいえば、歴史の終わりとはまた歴史の始まりにほかならないのである」（「歴史の終わり　歴史の始まり」）と反論していた。

しかし、わたしは「終焉」論にも、各種の「終焉」批判にも同じがたいものを覚えた。ヘーゲ

ル主義的な「終焉」の主張には、どことなしに権力的な臭気が染みついている。ミネルヴァの梟を気どり、歴史の終焉や時代の終焉を告げる者は、おのれを、フーコーが『監獄の誕生』で記述しているパノプティコンの監視者の立場に置こうとしているのではないか。そうした疑念を拭うことができない。

歴史や時代が「終焉」したとされる地点は、終焉以前の人や物や事件を全体として眺めわたせるような特権的な眺望台である。見ることは知ることであり、そして知ることは、その対象を所有し支配することでもある。終焉以前の人や物や事件は、それがなんであるのかを自分では知らない。ヘーゲル風にいえば即自態である。それらは、あの特権的な眺望台から見られることでのみ対自化され、はじめて、その真の意味もまた知られうるのである。把握され、位置づけられ、意味づけられることで、それらは眺望者に所有され支配されるに至る。それが「終焉」した時点で、歴史や時代を完了したものとして把握し、位置づけ、意味づける者は、つまるところ過ぎた歴史や時代の究極的な支配者となる。

だから、機会を見つけては「終焉」論を語りはじめる種類の人々には、どこかしら、いじましい権力志向や、無力感と裏腹である自己特権化の衝動が感じられるのだ。彼らは「終焉」を叫ぶことで、擬制的にでも歴史や時代や世界を所有しようと作為しているのである。あるいは、混濁や意味の散乱や無秩序に耐えられない脆弱な精神による、強引にでも世界を整除し、透明化してしまおうとする倒錯した観念的欲望が、そこにはある。

「終焉」論のイデオロギーについて、わたしはおおよそ、以上のような感想をもつ。しかし、そ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

のような「終焉」批判は、それ自体として誤りではないにしても、いま、あらためて何事かを明るみに出しうるものだろうか。とりわけ東欧の共産党政権の崩壊に触発されて、さまざまに語りだされた「終焉」論に対処するには、この種の批判は根本的に不充分であるような気がしてならない。自分の発想をも含めて、さまざまな「終焉」批判の言説に、わたしは何かしら手応えのない、頼りないものを感じてしまうのだ。

共産党政権、あるいはマルクス主義を掲げた真理国家＝収容所国家の存在そのものが、一九一七年から一九八九年まで二〇世紀のほとんどの時期を占めて、実は「終焉」論を制度的に体現してきたのである。ルカーチの『歴史と階級意識』に明らかであるように、歴史的な真理を宿した党とは、ほかならぬヘーゲルのフュア・ウンスであり、ようするに、あの特権的な眺望台にほかならない。歴史の眺望台が、パノプティコンの監視塔そのものとして実現される必然性は、真理国家が同時に収容所国家として組織された事実により、歴然と示されてきた通りだろう。

ルカーチ・マルクス主義は、二〇世紀の社会主義イデオロギーにおいて主流の座を占めたことはないにせよ、それが最高の水準でレーニン主義を哲学的に基礎づけているという事実は否定することができない。マルクス・レーニン主義の精神が、たんなる実証主義や客観主義であったなら、それが知的大衆の倒錯した観念的情熱を挑発し吸引して、「革命」のイデオロギーとして機能するような結果など生じえたわけがない。

ようするに共産党政権の崩壊とは、二〇世紀において暴威をふるったヘーゲル＝マルクス主義的な、かつて世界の半分をも支配した最大級の「終焉」論の制度的崩壊であり、強いていえば、

その終焉として捉えられなければならない。つまるところ一九八九年の事態は、「終焉」の終りを告げていたのである。それと同時に、ヘーゲル主義に対抗した「終焉」批判もまた、やはり終ったと考える以外にない。「終焉」は終焉し、「終焉」批判も終焉した。肯定的にであれ否定的にであれ、「終焉」について語ることの意味が、もはやどこにも存在していないような異様な場所に、一九八九年以降、われわれの世界は連れ出されたのではないか。

このように考えてみたとき、フクヤマ流の「終焉」論などは、そもそも問題にもなりえないことが歴然とする。もはや「終焉」が終ったのであり、終焉をめぐる言説の一切が、その存立する基盤を奪われたのである。繰り返すが、「終焉」批判にしても同じことだ。蓮實重彦は、「世界の表層を思いがけぬ亀裂が走りぬけるとき、その痕跡を目のあたりにするものは、その不慮の事態に対処しようとする善意から、きまって何ごとかの終りを予言してしまう。誰に頼まれたわけでもないのに、終末は間近に迫っていると口にすることが自分の役割だと錯覚し、ほとんど無意識のうちに、遊戯の規則にふさわしい屈託のなさで自分がいま捉えられている物語の主題を語ってしまうのである」(『物語批判序説』)と批判していた。

蓮實重彦風の「終焉」批判は、その「物語」批判の運命を反復するように、またしても愚劣な知的風俗と化して、何事であれ「終った」という言葉を禁句にし、それを魔女狩りさながらに狩りたてるような馬鹿げた風潮をもたらした。そこでは、柄谷行人による「大切なのは、それゆえ、自分がどのレベル・領域で語っているのかを自覚していることだ。さらに、どんな区切りもそれ自体始まりと終り(目的)を見いだすことである以上、それがなんらかの目的論的配置を避

けられないということを自覚しておくことだ」（『終焉をめぐって』）という慎重な留保は無視され、あるいは忘却されたのである。

レーニンは革命の条件として、「人々がもはや、昨日と同じようには暮らせないと感じていること」をあげていた。それが革命の条件であるか否かはともかくとして、一九八九年以降われわれは、もはや昨日と同じようには暮らせないし、また昨日と同じように考えたり、語ったりはできない場所に連れ出されている。われわれの存在の基盤そのものが、見知らぬものに変貌しつつあるのだ。なにも言葉狩りに血道をあげているような連中に、遠慮することはない。それを「終った」という言葉で語ってもよいだろうが、わたしとしてはむしろ、「突きあたった」という印象の方が強いように思う。

われわれは何かに突きあたっているのであり、その経験の切実さについて、あれこれの「終焉」論や「終焉」批判の言説は、ほとんど何ひとつ理解しようとはしないのである。ところで加藤典洋は、かつて吉本隆明の発言を検討しながら、次のように述べていた。

吉本は北極の氷が融けて、世界の水位があがり、いままで陸地だったところがいつのまにか大部分水没してしまったと、いっている。その領域を増しつつある海の部分と、日々広さを狭めつつある陸地の部分が、五対五、あるいは六対四で拮抗している間は、「社会」と人間の「内面」の対立は、現実的基盤をもっていた。しかし、水位がさらに上がり、人間の「内面」が「社会」に九割九分まで浸透され、覆いつくされるというような事態を前にして、なおも、も

し小説家が人間の「内面」（孤独）と「社会」の旧来の関係式に則って小説を書くとすれば、その小説は、彼の生きる世界の全現実の残り一分を覆うにすぎない。また、そのように小説を書きながらもし小説家が、自分の小説は自分の生きる世界の全現実に立脚していると思いみなすなら、彼は、彼の眼前にひろがる世界からそれと意識せずに眼をそらし、同時に深い自己欺瞞に陥っていることになるだろう。（『君と世界の戦いでは、世界に支援せよ』）

この文章を最初に読んだとき、わたしは、にわかには賛同しがたいものを感じた。内面と社会を対立させる発想が、どうにも古典的にすぎると思われたのだ。誰もが、そのような内面の消滅あるいは不在を前提にして、過去二十年以上を生きてきたのではないか。いや、二〇世紀の精神そのものが、一九世紀的な内面の消滅を前提として生じたのではないか。その意味で二〇世紀の精神とは、精神の不在にほかならない。

加藤の発想に対する疑念は、その後に上梓された『日本風景論』、そして今回とりあげる『ゆるやかな速度』でかなりの程度まで解消されたのだが、その上でまた、新たな疑問も生じたように思われる。

たぶん加藤典洋に、最近の三著で語られているような思考を強いているのは、あの「突きあたった」経験の切実さである。『君と世界の戦いでは、世界に支援せよ』では、吉本隆明の『マス・イメージ論』にも通底するだろう、古典的市民社会とは質的に異なる高度情報社会や高度消費社会について考えようとする姿勢が印象的だったが、『ゆるやかな速度』では、それは、むし

ろ「終焉」の終りをめぐる主題圏にまで達しようとしているようだ。

吉本隆明もまた必然的な変貌の、なにかに「突きあたった」経験の切実さから、たぶん『マス・イメージ論』を書いたのだろう。しかし、そこでは、一九八九年以降のわれわれが「突きあたって」いる経験の一部のみしか、扱われていないように思われる。周知のように『マス・イメージ論』は、あれこれの「終焉」批判論者による批判にさらされた。そこに幾分か見られる、ボードリヤール風でもあればリオタール風でもあるポストモダン論的な色彩が、「終焉」批判論者の反感を挑発したのだろう。

外的な視点からすれば、問題はむしろ明瞭である。ボードリヤールやリオタール、そして吉本隆明の議論の前提をなしている、過去二十年間の世界資本主義の超高度化と「モダンの終焉」や「労働価値の終焉」や「古典近代の終焉」は、結果として東欧の反共産党革命と社会主義世界体制の崩壊をもたらした。その点で『マス・イメージ論』の作業は、たしかに、われわれが思考することを強いられている世界の変貌と無関係ではない。しかし、世界資本主義の超高度化に触発された各種の「終焉」論は、それ自体で一九八九年以降の世界の変貌について充分に解明しうるものではない。なぜならば、先にも述べたようにマルクス主義の真理国家＝収容所国家の崩壊により、「終焉」そのものが終ったからである。

加藤典洋は『ゆるやかな速度』で、内面と社会を対立させ、後者が前者を急激に浸食しているというかつての議論を、『マス・イメージ論』の「変成論」や若森栄樹のラカン論『精神分析の空間』を補助線として活用しながら、カフカの『変身』を素材に、あらためて検討している。加

藤の暫定的な結論は、たとえば次のようなものだ。

ある日、眼がさめたら、世界がすっかり変わっていた。いま自分達に訪れている「世界の変成」というのは、そういうことではない。それは社会の変化、外界の激変ではあるだろうが、そこで『世界』はまだ変わっていないのだ。「世界が変わる」「世界が世界でなくなること」とはどのようなことか。それは外界の変化が自分に及ぶ、それが「自分が自分でなくなる」こととして現前する、そういうことではないのか。

世界の変貌についての、海と陸の比率をめぐるかつての量的な比喩は、すでに乗り超えられている。社会が内面の領域を浸食しているという把握の最大の難点は、あらゆる二元論的思考がそうであるように、背後に特権的な第三項を隠してもっている点にある。一方に社会を、他方に内面を二項対立的に配置しているのは、ようするに何者なのか。両者を頭上から鳥瞰し、その勢力比を計量しているのは何者なのか。社会と内面を対立させる加藤の議論は、こうした反問を避けることができない。

しかし、世界が世界でなくなることが、自分が自分でなくなることにおいて現前するという認識は、かつて見られた二元論の陥穽をまぬがれている。以前の議論では、認識する者は問題圏の特権的な外に位置していたが、いまや認識する「自分」そのものが、世界と自分の変貌という問題圏の内部に巻き込まれているのだ。『ゆるやかな速度』のように語り直されることで、『君と世

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook